

A・MUSEUM

vol.55
[2008.6.25]



ミュージアムパーク

茨城県自然博物館



クマゼミ

撮影：初宿成彦，撮影場所：大阪市



取手市で採集されたクマゼミの抜け殻

茨城にクマゼミはいるか？

まるで熊のように黒くて大きなクマゼミは、西日本では普通に見られるセミです。もともとクマゼミが生息しない茨城県では、何らかの理由で迷い込んだクマゼミの記録が、何件が残っているにすぎませんでした。

しかし、1995年以降、鳴き声を聞いたという情報や成体採集の記録が相次いで報告されるようになってきました。2007年夏には、取手市でクマゼミの脱け殻も採集されました。茨城県でクマゼミの記録が増えているのは、生きものが生息範囲を広げようとする本能的な営みなのか、それとも地球規模で進んでいる温暖化の影響なのか、はっきりとした結論は得られていません。

自然の小さな変化をみつけ、それにひとつひとつ答えていくことが、環境保全の基本だと思います。洞爺湖サミットが開催されるこの夏、皆さんもクマゼミの「シャーシャー」という鳴き声から環境問題を考えてみてはいかがでしょうか。（資料課 久松正樹）

第43回
企画展

熊 森のアンブレラ種

Bears : Umbrella Species in Forest Ecosystems

世界には現在8種のクマが生息し、そのうち日本には、エゾヒグマ(ヒグマの亜種)とニホンツキノワグマ(アジアクロクマの亜種)の2種が生息しています。森林生態系の頂点に立ち、アンブレラ種といわれるこれらクマですが、その生活や各地域での現況についてはまだまだ未知の部分がたくさんあります。しかしその一方で、記憶に新しいように2004年や2006年の秋には、各地でツキノワグマの人里への大量出没が起こり、毎年2,000~4,000頭が捕殺されているという現実もあります。

今回の企画展では、テディベアやくまのプーさんのような親しみやすいイメージから、人を襲う凶暴な獣のイメージまで、多様な顔をもつクマについて、これ

までに分かっていること、これから知らなくてはいけないことなどについて分かりやすく紹介します。

また、クマと人との間での不要な軋轢^{あつれき}を避けるためのヒントや、日本での歴史的なクマと人との関わりについても紹介します。(教育課 山崎晃司)

アンブレラ種

生態系ピラミッドの頂点に立ち、生活のために大きな面積を必要とする種を指します。このような種の生息環境を保全することが、その傘下にあるその他の生きものを環境変化などの“風雨”から守ることにつながることから“アンブレラ種”とよべます。



Living with Bears

© NPO法人信州ツキノワグマ研究会

世界のクマ



中国のパンダ(提供: Jien Gong)



ベネズエラのアンデスグマ(提供: saac Goldstein) スリランカのナマケグマ(提供: Shyamala Ratnayake)



マレーシアのマレーグマ(提供: Siew Te Wong)



アメリカのアメリカクロクマ(提供: David L. Garshelis)



台湾のアジアクロクマ(提供: Mei-Hsiu Hwang)



フィンランドのヒグマ(提供: Andres Ordiz)



カナダのホッキョクグマ(提供: Andrew Derocher)

展示構成

- 第1部 世界のクマの仲間
- 第2部 日本のクマの仲間
- 第3部 身の回りのクマたち
- 第4部 人とクマのこれから

会期 2008年7月12日(土)~9月21日(日)
開館時間 午前9時30分~午後5時まで(入館は午後4時30分まで)
休館日 毎週月曜日(7月21日・9月15日は開館し、翌日休館)

記念講座「人とクマとの関わり」

日時: 2008年7月12日(土) 13:30~15:30
対象: 中学生以上 定員: 300名(先着順)
講師: 田口洋美氏(東北芸術工科大学教授) 横田 博氏(野生動物写真家)

記念観察会「動物園のクマ舎を探検 - 上野動物園見学スペシャルツアー -」

日時: 2008年7月30日(水) 14:00~16:00
場所: 東京都恩賜上野動物園 対象: 小学生以上(小学生は保護者同伴)

定員: 50名(抽選) 参加費: 保険料1人につき50円、入園は無料
講師: 小宮輝之氏(上野動物園園長) 井出桂子氏(上野動物園飼育展示課)

記念ワークショップ

「クマの研究最前線・ツキノワグマで分かっていること、
分かっていること」

日時: 2008年8月9日(土) 13:00~16:30
対象: 高校生以上 定員: 300名(先着順)
パネラー: 小池伸介氏(東京農工大学)
後藤優介氏(立山カルデラ砂防博物館)
中下留美子氏(首都大学東京) 下稲葉さやか氏(京都大学)
安河内彦輝氏(九州大学) 中村さち子氏(岐阜大学)
コーディネーター: 山崎晃司(茨城県自然博物館)

学校のミニ博物館

～スクールミュージアム活動紹介～

小学校と博物館が連携して学校につくるミニ博物館、これをスクールミュージアムとよび、平成17年度に始まりました。今号からその活動の様子を紹介していきます。今回は設置式と平成19年度から参加した日立市立会瀬小学校、東海村立村松小学校の紹介です。

設置式

スクールミュージアムで最初に行われるのが設置式です。ここで当館から動植物の標本や図鑑などが貸与されます。多くの子どもたちがタヌキやムクドリの剥製などの標本に心を奪われ、設置式の会場は、これから始まるスクールミュージアムでどんな学習ができるのか、というワクワク感でいっぱいになります。



設置式のようす（村松小学校）

日立市立会瀬小学校

会瀬小学校は、東側に太平洋を望み西側に山並みを抱える豊かな自然に囲まれた日立市にある学校です。会瀬小学校では、3年生が昆虫をテーマにした学習を行いました。当館の学芸員が行った出前授業では、学芸員が標本を使って昆虫の種類や生態の話を始めると、子どもたちはその話にどんどんと引き込まれていきました。話が終わると、子どもたちは標本をじっくりと観察しながらスケッチを行いました。気に入った昆虫を思い思いに描き、満面の笑みで授業を終えました。



昆虫をのぞき込む子どもたち（会瀬小学校）

東海村立村松小学校

村松小学校は、校庭にわき水を利用したピオトープ（自然生態系の観察モデル）をつくったり、親子自然観察会を行ったりと自然環境教育に意識の高い学校です。村松小学校では、6年生が「化石のレプリカづくり」を行いました。三葉虫やアンモナイトなどの化石の型を選び、水と混ぜた石膏を型に流し込みます。石膏が固まるまでの間、当館の学芸員が化石の話をすると、子どもたちは興味深く聞き入っていました。そして型から出して自分がつくったレプリカを手にしたときの子どもたちの表情は最高でした。（教育課 木村正和）



化石のレプリカを手にする子どもたち（村松小学校）

リンリンの旅

上野動物園のジャイアントパンダ「リンリン」が4月30日に循環器障害で死亡しました。リンリンはオスで、1992年に上野で繁殖したユウユウとの交換で北京動物園から来園し、繁殖をめざしましたが、上野の2頭のメスが相次いで死亡したため海外のパンダとの繁殖が試みられました。当時メキシコの動物園に年頃メスのパンダが3頭飼育されていたため、共同繁殖契約を締結し2001年から2005年の間に3回もメ

キシコにわたりました。私も同行しましたが、帰国の際は、機内放送で「上野のリンリンが皆様とご一緒に日本に帰ります」とアナウンスが流れると乗客から大きな拍手が起こりました。結果的には繁殖は成功しませんでした。中国、日本、メキシコと環境の変化を乗り越え、元気に長旅をしてくれました。リンリンの永遠の旅立ちの報に接し、お疲れ様でしたとの思いでいっぱいです。

コラム by director SUGAYA



イラスト：羽富阿紀（ミュージアムコンビニオン）

ジュニア学芸員イバラキに会う

～地球規模での博物館活動を目指して～

「イバラキと名づけられたキーウィとの対面の感動を子どもたちにも！」こんな夢が実現しました。

ニュージーランド子ども大使派遣事業として、平成20年3月21日から27日まで、当館のジュニア学芸員4名とともに、私は初秋のニュージーランドへ渡りました。主な訪問先は、昨年の夏開催した企画展「キア・オラ！ニュージーランド キーウィと人がくらす島」に協力していただいたニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワ（以下「テ・パパ博物館」という。）や環境保全局ファンガレイキーウィ保護区です。



ファンガレイでのキーウィとの対面。当館との交流を記念して写真のキーウィレンジャー、ベテグラハム氏が「イバラキ」と名づけてくれた。

当館では、地球規模での博物館活動を推進することを活動方針の一つとしており、企画展を通して築いた海外機関との協力関係を展示だけで終わりにせず、いかに深め、いかに継続するかが課題でした。そこで、今回の事業は、その協力関係を教育普及活動の分野にも広げ、実践するといった重要な取り組みでした。

事業では、ニュージーランドの自然を直接体験すること、現地での人々との交流を重視しました。ジュニア学芸員たちの感想をみると、ファンガレイでの野生のキーウィとの対面や、テ・パパ博物館スタッフの案内で訪問したカロリ野生生物保護区ナイトツアーで

の星空のようなツチポタルと本物の南十字星との出会いが強く印象に残ったようでした。また、テ・パパ博物館では、同館スタッフと交流の機会をもち、自分たちの博物館での活動や日本の自然、学校生活について英語で紹介しました。この体験から子どもたちは、コミュニケーションのための英語の大切さを痛感したようです。さらに、通訳としてもお世話になったテ・パパ博物館スタッフのスーザン木原さんや、以前茨城県にも住んでいたというファンガレイ環境保全局スタッフのポーラさんなどの交流を通して、将来、国際的に活躍してみたいとの思いを強くするジュニア学芸員もいました。

今後、各ジュニア学芸員が現地で体験したことや、交友関係を自分たちの活動に生かしていけるよう、支援していきたいと思います。また、いつの日か、逆にニュージーランドの子どもたちを当館に招待するようなことが実現できればと考えています。

最後になりましたが、本事業は、財団法人カメイ社会教育振興財団（仙台市）の助成、ニュージーランド大使館、ニュージーランド航空の協力を得て、実現することができました。ここに厚くお礼を申し上げます。

（資料課 栗栖宣博）



テ・パパ博物館スタッフとの交流後の記念撮影。前列左端から日本人スタッフの木原さん、ジュニア学芸員の生井さん、本間さん、後列左端がジュニア学芸員の上原さん、右端が鈴木さん。

だれの足あとでしょう？

博物館の展示室には私たちを楽しませてくれる展示がたくさんあります。皆さんは動物の足あとを見たことがありますか？見たことがない人は、ぜひ第3展示室へ行ってください。その床には、ある「足あと」があります。一体だれの足あとでしょう？

よく見ると2種類の足あとが描かれています。

1つは「ノウサギ」です。ノウサギは、後足の足あとの長さが前足の足あとよ

りも3倍程あり、後足と前足では全く違う形の足あとになります。この足あとから後足の足の裏の面積が広いことがわかります。そのおかげで、雪の上でも埋まりにくくスムーズに歩くことができます。

では、残る1つはだれの足あとでしょう？1本の線の上を歩いたように足あとがあります。きっと近くの展示にヒントがありますよ。ぜひ探してみてください。

（ミュージアムコンパニオン 根岸真利子）

小さな発見 - ミュージアムコンパニオン -



ノウサギとキツネの足あと

第4 第5展示室の展示がリニューアル

今年、第4、第5展示室の展示が一部リニューアルしましたので、ここで紹介します。

第4展示室



第4展示室「動物をささえる骨格」

これまで第4展示室の顔として活躍していた昆虫型ロボットとヒト型ロボットのコーナーがこの4月から様変わりしました。新たな展示では「動物をささえる骨格」がテーマで、^{ないこつかく}内骨格をもつセキツイ動物の骨格標本のほか、^{かた がる がいこつかく}硬い殻（外骨格）に包まれたエビやカニなどの^{はくせい}剥製が展示されています。今後は、ゴリラやタカアシガニが、皆さんをお迎えすることになります。



第4展示室「さまざまな植物のかたち」

また、「さまざまな植物のかたち」のコーナーでは、昨年度、空中で回転するタネが観察できる^{ふうどう}風洞実験装置が設置されました。今回、その装置の右側を、全てタネに関する展示にしました。植物は自分のなかまの分布を広げるために、^{しやしさんぶ}さまざまな工夫をしています。新たな展示では、^{たぐ}種子散布のしくみや多様なタネの形態が紹介されています。きっと植物の^{たく}巧みな戦略に驚かれることでしょう。

第5展示室



第5展示室「美しく多様な茨城の自然」

第5展示室の入り口付近の展示も変わったことにお気づきでしょうか。ここでは大きな写真パネルと標本で茨城の多様な自然を紹介していますが、今回、標本を増やし、展示がさらに充実しました。展示室に入って右側では、^{はなそのさん}花園山、袋田、霞ヶ浦、筑波山など、場所ごとに特色のある動植物や岩石・^{こうぶつ}鉱物が展示されています。一方、左側では、オオウメガサソウやヒヌマイトトンボなど茨城県で絶滅のおそれのある種が紹介されています。

博物館では、常に進化する展示を心がけています。皆さん、どうぞ新たな展示をお楽しみください。

（資料課 池澤広美）

どこ クジメは何処にいる？

皆さんは、第3展示室の海の^{すいそう}水槽に“クジメ”という魚がいることをご存知でしょうか。この魚は、海藻や岩陰^{いわかげ}に隠れて生活しています。体の色は暗褐色で、体の横には小さな白い斑点^{あんかしよく}があるだけの大変地味な色をした魚ですが、危険を感じると身を守るために、体の色を周りの海藻や岩の色に変えることができます。注意して見なければつい見逃してしまいそうです。

海の水槽のクジメたちは、去年の

秋に海に^{もく}潜って採集してきました。海の中では、より一層うまく体の色を海藻や岩など周りの環境にあわせて色を変えて隠れているので、水槽越しに見つけるよりも大変でした。

近頃はすっかり水槽内の環境にも慣れ、それぞれお気に入りの場所をもっています。この見逃しがちな魚を探してみるのも、水槽を楽しむコツの一つです。ぜひ、皆さんで観察してみてください。

（水系担当 廣瀬南帆）

おさかな通信



クジメ

クマにつくダニ！

当館は、約2,000種のダニの標本を収蔵しています。その標本の中で、クマにつくダニを、7月12日（土）から開催される企画展『熊 - 森のアンブレラ種 - 』で展示する予定です。クマにつくダニは、マダニとよばれる大型のダニです。マダニに関する文献を調査したところ、日本ではツキノワグマにつくマダニのなかまは10種が記録されています。現在、当館ではそのうちの6種を収蔵しています。

マダニは、ダニ目後気門亜目（マダニ亜目）に属するダニの総称です。マダニはダニのなかまとしては大型（体長1mm以上）で、硬い表皮をもち、吸血性であることが特徴です。世界ではこれまで3科約870種のマダニのなかまが知られており、このうち国内にはマダニ科とヒメダニ科の合わせて約50種が生息しています。マダニ科のダニが寄生する動物の範囲は種によってさまざま、1種の動物だけに寄生する種もいれば、クマも含めて哺乳類や鳥類など幅広い動物に寄生する種もいます。もちろんヒトにも寄生します。ヒメダニ科のダニは主に鳥類やコウモリに寄生します。まれにヒメダニ科のダニもヒトに寄生する場合がありますが、哺乳類に被害を及ぼす種の多くはマダニ科のダニです。

今回企画展で展示するマダニは、当館の山崎首席学芸員がツキノワグマの生態調査を行った際に採集した標本です。ツキノワグマにつくマダニの調査研究は、

あまり進んでおらず学術的に見ても貴重な標本です。

現在、展示準備のため採集した標本の種名を調べる作業をしています。企画展では、意外なほどに大きいマダニをぜひご覧ください。（資料課 湯本勝洋）



キチマダニの雌（吸血している個体：左 吸血していない個体：右）
撮影：藤澤敏夫（（独）動物衛生研究所）

当館に収蔵しているマダニ類の標本

| 種名 | 個体数 |
|---|-----|
| キチマダニ <i>Haemaphysalis flava</i> | 54 |
| ヤマトチマダニ <i>Haemaphysalis japonica</i> | 34 |
| フタトゲチマダニ <i>Haemaphysalis longicornis</i> | 39 |
| オオトゲチマダニ <i>Haemaphysalis megaspinosa</i> | 1 |
| ヒツツグマダニ <i>xodes monospinosus</i> | 2 |
| ヤマトマダニ <i>xodes ovatus</i> | 2 |

木星の衝と世界天文年

月探査衛星「かぐや」からの鮮明な地球の映像や国際宇宙ステーションへの日本の実験棟「きぼう」の取り付けなど、宇宙にかかわるニュースが続きました。

そして、今年の夏は木星が見頃です。夏の夜、南の空に1つの明るい星が見えます。これが太陽系で最大の惑星・木星です。木星は7月9日に衝（地球から見て惑星が太陽の反対に位置する）となり、この頃は木星を一晩中観察できます。明るさは-2.7等級で、夕方の西空に見える「宵の明星」金星（明るさは-4.4等級）が沈めば一番明るい星となります。

木星といえば表面の縞模様や大赤斑とよばれる大きな渦、また多くの衛星をもつことなどが知られています。特に大きな4個の衛星は低倍率の望遠鏡でも木星のそばで確認することができます。この4個の衛星を見つけたのは地動説を唱えたことでも有名なガリレオ・ガリレイで、これらの衛星をまとめてガリレオ衛星とよびます。また、木星を周回しながら観測している惑星探査機にもガリレオの名が付けられています。

さて、木星の衛星の発見にはとても画期的なできごとがかかわっています。それは望遠鏡の利用です。望

遠鏡の発明を伝え聞いたガリレオは、1609年に10倍率、20倍率の望遠鏡をつくり、それをを用いて人類で初めて星に望遠鏡を向けました。1610年に木星の衛星を発見したほか、月のクレーターや、天の川が無数の星の集まりであることなどを発見しました。

ガリレオが望遠鏡を星に向けてからちょうど400年目になる来年を、国際連合、ユネスコ、国際天文学連合は「世界天文年」と定め、世界中でいろいろな行事計画を進めています。また、日本では来年の7月22日に九州南方で皆既日食が起こります。今後も宇宙から目が離せませんよ！（教育課 木村正和）



木星

撮影：飯田毅（坂東市立七郷小学校）

トピックス

炭焼き窯が完成しました！

当館の野外施設の一角に、木炭や竹炭をつくるための炭焼き窯が完成しました。この炭焼き窯は、来館者の皆さんが博物館で楽しい体験ができるように願い、また、500 程度の温度で窯を密閉して焼きあげる「黒炭」をつくることから「博楽玄窯」と名付けました。茨城竹炭振興会の会員や地域で里山活動を行っている方々、博物館ボランティアの方々など総勢60名以上の協力を得て、ササや低木の下草刈り、窯の焼き上げや小屋がけなど、延べ40日以上をかけて完成しました。

窯の大きさは、縦2m70cm、幅1m80cm、高さ1m40cmで、たとえば竹炭をつくる場合、太いモウソウチクを割って詰めると40本以上を焼くことができます。5月下旬には、博物館内の竹林や雑木林の間伐材も利用し、地域の里山活動団体「七郷里山会」と協力して竹炭を焼き上げました。これからは、来館者の皆様にもイベントなどを通して、炭づくりや薪割り、竹割りなどの楽しい体験をしていただきたいと思います。皆さん、博物館においでの際は、ぜひ炭焼き窯「博楽玄窯」を見学してってください。

(教育課 亀山浩二)



はじめて焼いた炭の取り出し作業のようす

フューチャー・イズ・ワイルド

5月4日(日)は年に4回ある無料入館日サインスデーのうちの1日で生物・科学の日です。当日は、あいにくの曇り空でしたが、連休の中日ということもあり、9,600人ものお客様をお迎えすることができ、たいへんな賑わいでした。

この日は炭焼きガイド、野外ガイドツアーなど5つのイベントを実施し、いずれも多くの参加をいただきました。

イベントのひとつ「フューチャー・イズ・ワイルド」では、第42回企画展「化石はたのしい！」でご紹介した未来生物の映像を映像ホールで上映しました。500万年後、1億年後、2億年後という、気の遠くなるようなはるか未来の映像を見ながら、企画展チーフの滝本秀夫首席学芸主事が解説を加え、未来の地球の地形や気候についてもあわせてご紹介しました。参加者は、大

画面の映像の迫力に圧倒されながら、未来のいきものたちの奇妙な姿に見入っていました。

化石を調べることで過去のことだけでなく、未来の地球の姿も見えてくる、という企画展チーフからのメッセージがみなさんに伝わったことと思います。

今後も、サイエンスデーには楽しいイベントを企画しますので、お楽しみに。(企画課 佐川三輪子)



サイエンスデーイベント「フューチャー・イズ・ワイルド」

コハクを探そう

第42回企画展「化石はたのしい! - 巨大恐竜からミクロの世界まで - 」開催記念イベント「コハクを探そう」を5月25日(日)に開催しました。当日は前日からの雨も上がり、観察会日和となりました。最初に、クビナガリュウの骨や歯、多くのサメの歯が発掘されたいわき市入間沢川の現地を視察後、その上流の地層が露出している場所で地層の観察、コハクの採集を行いました。

採集場所が入間沢川の水辺にあるので、参加者は足下をぬらし泥だらけになりながら地層に向かいました。そんな中でほぼ全員がコハクを採集することができ、なかには子どものこぶし大のコハクの塊や昆虫が閉じこめられていると期待されるコハクを発見した人もいました。

その後、採集場所から約300m北側のいわき市大久川のフタバズクリュウ発掘地、いわき市小久町南沢の竜脚類の歯やコハクの発掘地を視察し観察会を終えました。参加者は、真剣にそして楽しくコハクを探そうことができたと思います。(資料課 国府田良樹)



入間沢川右岸玉山層でのコハクの採集。採集されたコハク

博物館でコンサート

ミュージアムナイト



アンサンブル アクアレラによる演奏。左端から松浦孝成氏（リコーダー）、浅井 愛氏（リコーダー）、畑内 浩氏（ギター）。

夕方、博物館の閉館時間が迫る頃、忙しそうに動き回り会場を設営するスタッフたち。やがてイベント参加者の方々が集まってきました。ミュージアムナイトの前半は、企画展「化石はたのしい」のガイドツアーです。企画展のスタッフが自分で担当したコーナーを自ら解説するのですから、力が入ります。参加者の方々からは「解説をしてもらい、内容がよくわかり、単に見ているときよりはるかに興味をもてた。」「前回来たときにはスッと通ってしまった所でも、意外な話が聞けたりして、得をした気分になりました。」などの感想をいただきました。

後半は恐竜ホールでのコンサートです。リコーダー2人とギターのアンサンブルによる澄んだ音色が恐竜ホールに広がっていきました。2m以上もある大型のものから指に隠れてしまいそうな小さなものまで、さまざま

な種類^{くし}の笛を駆使し、また巧みな話術で楽器の説明などを交えながらコンサートは進みました。参加者の方々からは「すばらしかったです。感動しました。日頃の疲れた心^{いや}が癒されました。」「演奏も会場も素敵だった。子どもたちも静かで感心した。」などの感想をいただきました。コンサートの最後には、「コンドルは飛んでいく」などのおなじみの曲^{ちやうしゅう}に聴衆も手拍子で参加し、会場が一体となって幕が閉じました。帰路につくみなさんの満足そうな様子を拝見し、企画してよかったと実感しました。

（教育課 滝本秀夫）

編集後記

この4月に博物館に赴任して3か月経ちましたが、その短い間にも博物館野外施設では季節を感じる事ができました。満開の桜や頭を出したタケノコに春を感じ、日差しを浴びた木々の若葉にすぐそこまできた夏を感じます。今号よりA・MUSEUMを担当することになりました。皆様に博物館の良さを伝えていきたいと思ひます。

（Y.O.）

【交通案内】



- 常磐自動車道谷和原ICから20分
- つくばエクスプレス守谷駅下車
～関東鉄道バス「岩井行き」又は「猿島行き」乗車
～「自然博物館入口」下車、徒歩5分
- JR柏駅で東武野田線乗り換え、愛宕駅下車～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩10分



【開館時間】

午前9時30分から
午後5時まで
(入館は4時30分まで)
※ペット及び遊具等のお持ち込みはご遠慮ください。

【入館料】

| 区分 | 本館・野外施設 | | 野外施設のみ | 年間パスポート |
|--------|----------------|----------------|----------------|---------|
| | 企画展開催時 | 通常時 | | |
| 大人 | 720円 (580円) | 520円 (420円) | 200円 (100円) | 1,500円 |
| 高校・大学生 | 440円 (300円) | 320円 (200円) | 100円 (50円) | 1,000円 |
| 小・中学生 | 140円 (70円) | 100円 (50円) | 50円 (30円) | 300円 |

(注)：()内は団体料金(20名以上)
未就学児・満70歳以上の方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。次の日は入館料が無料です。
●5月4日(みどりの日) ●6月5日(環境の日)
●11月13日(茨城県民の日) ●春分の日
●高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
(ただし、春・夏・冬休み期間中を除きます。)

【休館日】

●毎週月曜日
※ただし、6月23日(月)～6月28日(土)は館内整理のため休館となります。
※7月21日(月)・9月15日(月)は開館し、翌日が休館となります。

自然博物館ニュース A・MUSEUM(ア・ミュージアム)
A・MUSEUM (AMUSEMENT+MUSEUM)

企画・編集：ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画課/発行2008年6月25日
〒306-0622 茨城県坂東市大崎700番地 TEL0297-38-2000 FAX0297-38-1999
URL http://www.nat.pref.ibaraki.jp/
E-mail webmaster@nat.pref.ibaraki.jp
メールマガジンも配信中。登録はホームページから

ミュージアムパーク茨城県自然博物館は、誰もが親しめ、誰もが楽しめるア・ミュージアム(アミューズメント+ミュージアム)をめざしています。